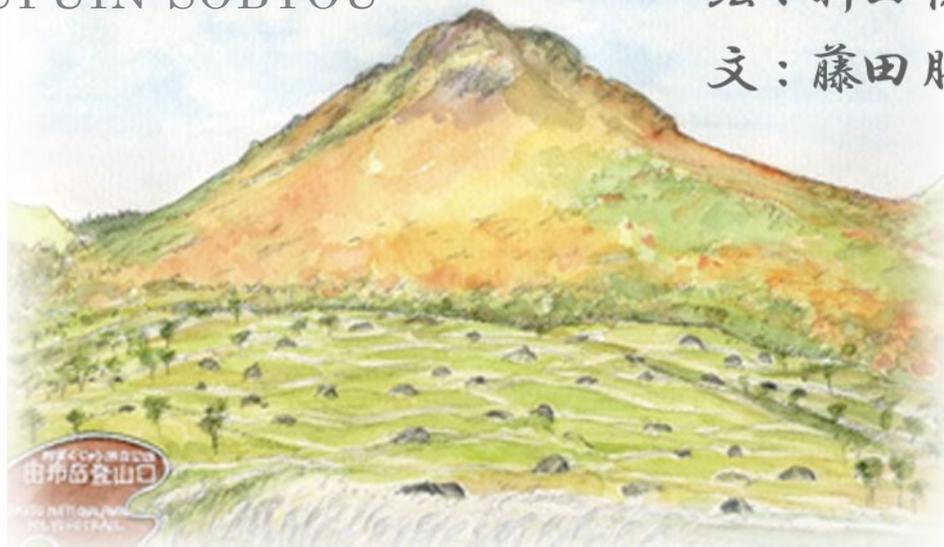


湯布院素描

YUFUIN-SOBYOU

絵：新山俊則

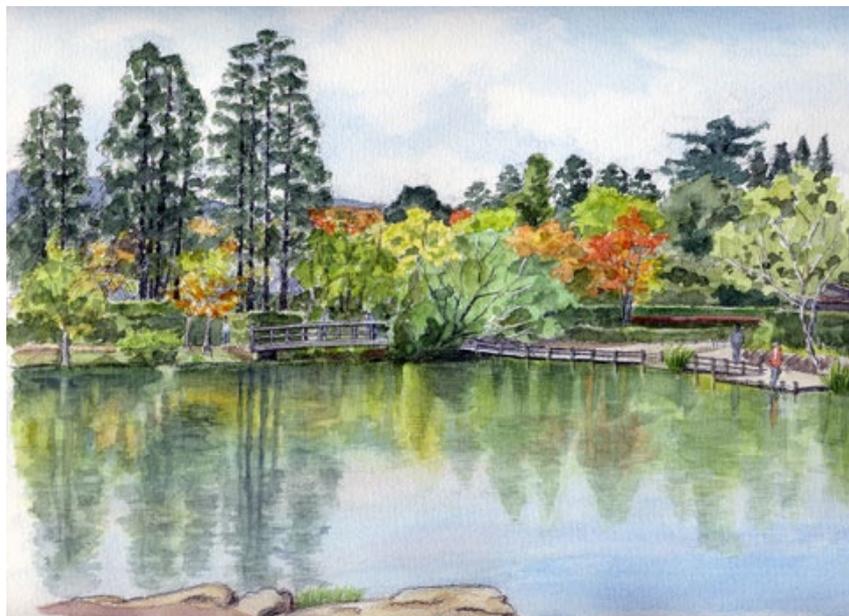
文：藤田勝英



金鱗湖

由布岳のふもとにあるこの池はその昔、『岳本（だけもと）の池』と呼ばれていて、湯布院のへそともいえる象徴的な池。その神秘的な水面に由布岳が投影され、時折、魚が飛び跳ねる。旅人はこの池を見て心が癒やされる。

池は由布岳の伏流清水と温泉の流れ込みが混ざって、生ぬるい。冬場は池から湯気が立ち上り、由布院盆地に特有の朝霧をもたらす。湖畔には天祖（てんそ）神社という古い神社があり、いわくありげに水中に鳥居が立っている。かつて由布院盆地が湖であった名残をとどめているようだ。昔はもっと大きな池だったが、1596（慶長元）年の大地震でかなり埋まり、水位も下がって狭くなった。現在は1 罫を切っ



ている。それでも湯布院に来る観光客は必ず金鱗湖を訪ねる。「金鱗湖を見ずして湯布院を語るな」ということだろうか。

「金鱗湖」と名付けたのは、この地をよく訪れていた幕末・明治初期の儒

学者毛利空桑（くうそう）。飛び跳ねた魚のうろこが夕日に輝いていたのを見て名付けたという。その昔から文人墨客が訪れていたわけ。池の水は由布院盆地を縦断して大分川に注ぎ、その源流となっている。

下ん湯

金鱗湖のそばに小さな湯殿が立っている。草ぶき屋根の共同温泉「下ん湯」である。湯布院には昔から、由布岳の恵みの温泉場が至る所にあった。土地の人たちが野良仕事の後にみんなで仲良く汗を流していた。

「下ん湯」は一度に7、8人が入れる。それも昔と変わらず今でも男女混浴だ。時折、観光客も入浴している。すぐ隣に洗濯場もあり、庶民の社交場でもある。地元の人たちが利用する共同温泉は多いが、中でも「下ん湯」は昔の温泉場の姿を今に残しており、湯布院の原風景がそこにある。管理は地区民が行い、入浴料は200円。入り口の小さな箱に入ればよい。おおらかなものだ。

ほかにも地区の共同温泉が20カ所近くあるが、男女混浴はここだけ。この



うち観光客が入れるのは「下ん湯」(200円)「湯の坪温泉」(同)、「乙丸温泉」(100円)などで、ほかにも「川西温泉」「せの湯」「金の湯」「銀の湯」などが10軒ほどある。後は土地の人しか利用できない地域の共同温泉で「新湯上(うえ)

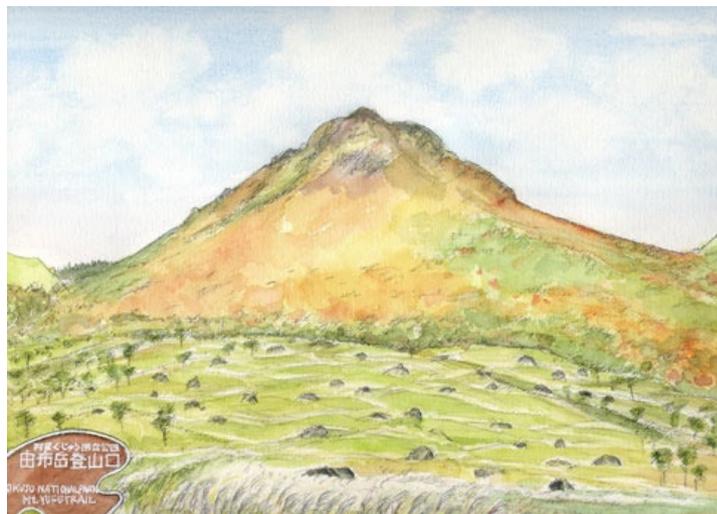
ん湯」「加勢の湯」「堂本温泉」などがある。各旅館や温泉施設「健康温泉館クアージュゆふいん」でも入浴できるが、入浴料金は共同温泉より高くなる。これら多くの温泉場がこの静かな盆地にひしめいている。

由布岳

湯布院の象徴「由布岳」は、由布院盆地の東にそびえる。大昔は活火山だったが、今は死火山で、その雄々しい姿は魅力的。富士山に似ていることから「豊後富士」とも呼ばれる。

由布岳の噴火は岩石の成分分析の結果、20万～200万年前の有史以前と推定され、太古へのロマンをかき立てる。湯布院の温泉はマグマで温められた地下水がわき出たもので、土地の人たちはその恩恵に浴している。

山頂の噴火口跡は、険しい岩場になっており、直径は約130m。東西の峰が対峙（たいじ）。西の峰に立つ標柱に「標高1584m」と書かれている。火口を一周（お鉢回り）する人もいるが、東の峰は登りやすく、西の峰は鎖を握って岩を上るスリル感が味わえ



る。山頂からの眺めも格別で、晴れた日は東に鶴見岳と別府湾から四国が、西はくじゅう、阿蘇連山が望める。

登山口は東側が猪ノ瀬戸寄りの正面（旧一軒茶屋）と、原生林の茂る南側のふもと（岳本）にあり、山頂まで約2時間はかかる。梅雨の晴れ間には、雨に洗われた山頂付近のミヤマキリシ

マが山肌をピンク色に染める。

正面登山口の辺りはなだらかな草原で、秋はススキが覆う。遠くから見ると牛が放牧されているように黒い岩がたくさん転がっているが、近づいて見ると2、3mもある溶岩だ。おそらく由布岳が噴火したときに飛んできたのだろうが、自然の力に驚かされる。

由布岳

奈良時代初期に編さんされた豊後風土記によると、「柚富郷は郡の西に在り。この中に栲(たく)の樹多(さわ)に生たり。常に栲の皮をとりてもって木綿(ゆふ)に造れり。因(よ)りて柚富郷という」とある。

「栲」は「楮(こうぞ)」の古名で、当時この辺りにはクワ科の楮の木が多く自生し、その皮を取って木綿(ゆふ)＝古代の布＝を作ったので、それが地名になったといわれている。楮の樹皮は紙や布の材料になり、木綿は神事に使われる白い紙や布だった。

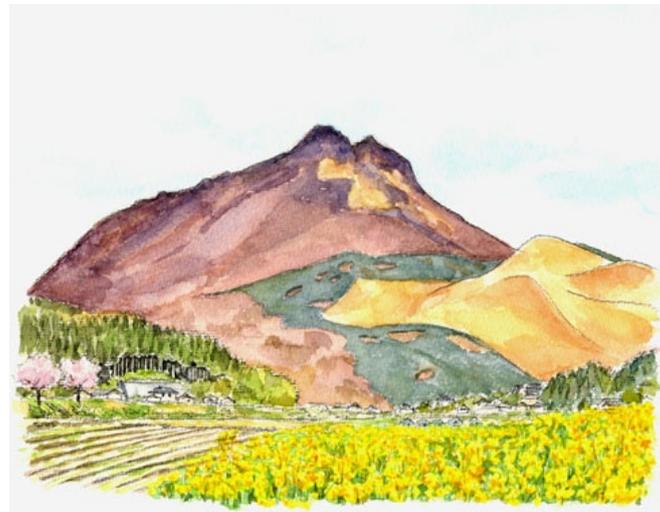
万葉集に由布院は二首詠まれているが、その一つに「おとめらが 放(は

なり)の髪を木綿(ゆふ)の山 雲なたなびき家のあたり見む(詠み人知らず)とある。木綿の山は今の由布岳のことである。

髪を「結う」を「木綿」に掛けている。

平安時代の「和名抄」では「由布郷」と記述されている。「由布院」の「院」は、米や産物を租税として納めた収蔵庫のことで、「倉院」と呼ばれた。由布郷に倉院があり、それが地名になって「由布院」になったという。

「ゆふ」には「柚富」「木綿」「由布



などの字が当てられてきたが、現在の「湯布院」は、1955年に由布院町と隣の湯平村が合併し、湯平の「湯」の字を使って「湯布院町」になった。昨秋は挟間、庄内の両町と合併し、由布市湯布院町になった。温泉が豊富なので「湯富院」にしてはとの声もあったとか。

宇奈岐日女神社

湯布院を語るとき「宇奈岐日女（うなぎひめ）神社」は欠かせない。昔は火山の噴火や地震、津波、落雷、豪雨、干ばつ、冷害などの自然現象は科学的に解明されておらず、すべて神のなせる業と信じられていた。このため、山をご神体として崇拝する山岳信仰が広まっていた。

由布岳もその一つで、川上地区にある宇奈岐日女神社のご神体である。富士山の浅間神社や鶴見岳の「火男火売（ほのおほめ）神社」のように、人々は大きな自然の力を神々に祈ることによって鎮めようとした。

ＪＲ由布院駅から２kmほど南東に進むと、厚生年金病院の建物が見えてくる。近くの杉木立の中に「宇奈岐日女神社」が鎮座する。別名「六所宮（ろくしょ

ぐう）」とも呼ばれ、古くから地元の人々に信仰されている。

当初は宇奈岐日女しかまつっていなかった。後に神仏混交になると「六道」＝地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上＝の観念を持つ修験道が山岳信仰の中に入ってくる。平安中期、津江地区に「仏山寺」を開基した性空上人が、

由布岳に六観音の霊場を開き、六柱の神々をまつたことから「六所宮」と呼ばれるようになったと伝えられている。

宇奈岐日女は神に仕えるみこだった。神のお告げを伝えることによって



いつしか政治をつかさどり、神格化したのではないかとされている。湯布院を最初に支配したのは女性であり、ミニ卑弥呼ともいえる。いま湯布院が女性に人気があるのもうなずける。

狭霧台

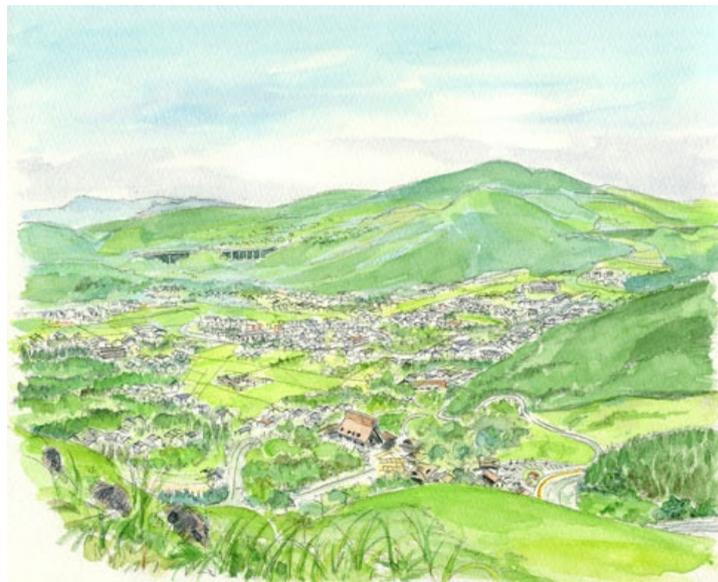
別府市から九州横断道路を湯布院の方に向かって行くと、由布院盆地を一望する「狭霧台」がある。山に囲まれた、のどかで静かな田園風景が眼下に広がり、こぢんまりとした集落が目飛び込んでくる。

この盆地は、けげげしい色や目立って高い建物がない。派手な屋外広告物やネオンもあまり見掛けない。騒がしい都会から逃れてくる観光客のために「潤いのある町づくり条例」が制定されているためだ。景観に留意して建物の高さは商業地域で18m（5階建て）まで、そのほかは15m、住宅地は10m以下などと、地域によって低くするように規制されている。

1952年、突然この地に降ってわい

たのが「由布院ダム計画」。当時は戦後の電力不足で、停電が日常茶飯事だった。このため、海拔約450mの盆地を水浸しにするダムを建設し、水力発電をしようという話が持ち上がった。

起案者は日産コンツェルン創始者で時の財界の大御所鮎川義介氏。驚いた地元民は反対運動を起こし、静かな盆地が騒然となった。運動の中心になったのは地元の青年団で、後に町長、国



会議員にもなった岩男颯一（ひでかず）氏らが先頭に立った。計画は翌年頓挫。もしダムになっていたら今ごろ由布院盆地は水底に沈んでいた。今、狭霧台から見る朝霧の由布院盆地は一幅の絵だ。

蹴裂権現社

由布院盆地は東に由布岳、西に野稲山、南に倉木山、北に福万山と四方が1000m級の山々に囲まれた盆地である。盆地の海拔はおよそ450mで、冬は冷え込む。

太古の昔、盆地は湖だったという説があり、裏付ける証拠がいくつも残る。たとえば水田で“ドジョウ釜”と恐れられている所がある。底なし沼のように人がズルズルと胸まではまり込み、農耕に牛馬を使うことができなかった。

神秘的な金鱗湖もその名残である。盆地内ではシジミ貝の化石も出土している。古い民家も盆地周辺の小高い山手に張り付いている。昔の人は治水に大変苦労した。

伝説では湯布院を支配していた宇

奈岐日女（うなぐひめ）という神様が、盆地の西にあった山を力持ちの家来の権現に命じて蹴（け）破らせた。たちまち湖水は流れ出し、豊かな土地が開けた

と伝えられている。山を蹴破った蹴裂（けさき）権現をまつるほこら「蹴裂権現社」が川西地区に残る。

大分市から国道210号で由布院盆地に向かう途中にある二つに割れた小高い山がそれ。国道沿いの「川西温泉」のそばにコンクリートの階段が山に向



かって延びている。登り口にある蹴裂権現社の由来を書いた案内板に『由布院盆地を開拓した恩人』という文があった。階段は約200段。山の上に1m四方の小さなほこらが立つ。春には桜が咲き、地元の人たちが今も大切に管理している。

由布岳

由布岳周辺にはいろんな伝説がある。その一つが為朝の大蛇退治。平安時代後期、若くして九州に流された源為朝は、豊後国由布岳のふもとに暮らしていたという。その後、九州一円に勢力を張り、鎮西八郎為朝と呼ばれる勇猛果敢な武将になった。

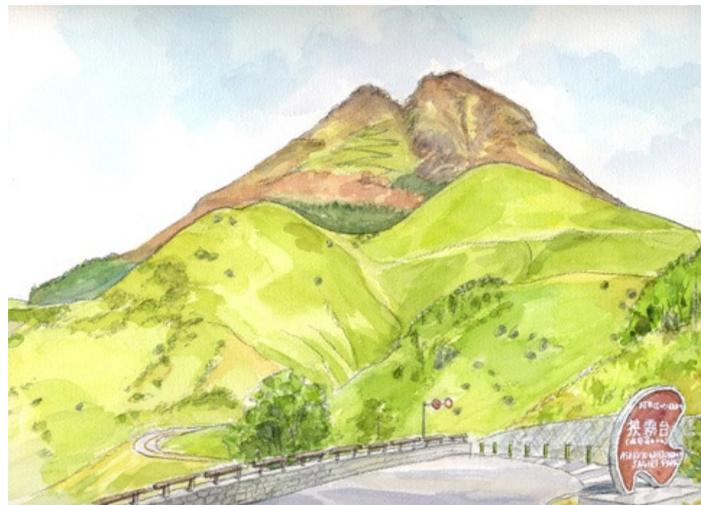
いつもシカやイノシシを追って由布岳を走り回っていたが、ある日、由布岳の5合目付近で連れていた犬が激しくほえた。「うるさい」と言って為朝の家来が犬の首をはねた。ところが犬の首は宙を舞い、近くで為朝に襲いかかろうとしていた大蛇のかま首にかみつ、そのおかげで為朝は一難を逃れた。

為朝はその場に犬の墓を作り、杉を

2本植えた。この話は江戸時代(1807年)に刊行された滝沢馬琴の「椿説弓張月(ちんせつゆみはりづき)」に武勇伝として書かれている。そ

の杉の木は1902年、心ない村人によって伐採された。犬塚の方は56年ごろまで確認されていたが、いまは見当たらない。

山を下るとうっそうと茂るコナラの原生林がある。金鱗湖の北の方にあり、比較的人里に近いので、すぐに散見できる。コナラはナラ科に属する樹木で、



いわゆるドングリの木である。小鳥や昆虫、小動物などもいて、一歩足を踏み入れるとジャングルのように迷い込みそうな森になっている。

木綿(ゆふ)一袖富一由布一湯布と変遷してきた地名の原点である楮(こうぞ)の木も、この茂みの中でしぶとく生き続けているかもしれない。



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。NAN-NANでは、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読

者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたくと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局へお寄せください。

NAN-NANでは、この「湯布院素描」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック!!!

大分合同新聞社



別府大学

■ 「湯布院素描」について

別府市在住の画家、新山俊則氏が由布市湯布院町に足しげく通い、風情豊かな四季の景色を描きとめたスケッチ集。解説とともに大分合同新聞に掲載され、2006年3月9日、1冊の本にまとめられて発刊された。本体2190円＋消費税。デジタル版「湯布院素描」は、その一部を抜粋したものです。全25点の素描と解説文は書籍でご覧いただけます。

→ 「大分合同新聞社の本」のページ

デジタル版「湯布院素描」

2006年4月1日 初版発行

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町3-9-15

大分合同新聞社 総合企画室内

(問い合わせ・情報提供はこちらからも→クリック)

編集 大分合同新聞文化センター

制作 別府大学情報教育センター

© 大分合同新聞社 2006